

川谷維摩 大学教員

北海道大学大学院

理学院卒

私が博士課程へ進学した際、修士課程の同期は皆就職してしまいました。自分で選んだ道とは言え一人取り残されたような感覚でした。当時はまだまだコロナが収まっていませんでしたので、自分は実験のために大学に来ていましたが、研究室のメンバーとは殆ど顔を合わせることもなく誰が何をやっているのかも分からないような状況でした。研究室には博士課程の学生は自分しかいないため、拠り所もなく暗中模索、五里霧中でした。一応日々の研究は自分のペースで進めていましたが、これで本当に良いのか、自信はありませんでした。

D2 の終わりの頃に研究室の OB・OG さんが集まる機会があり、その場で博士課程修了生の先輩方に出会いました。一人で悩んでいた実験の事や学生生活のことなど色々と相談に乗ってもらい、自分の状況を理解してもらえてとても安心しました。さらに、「博士課程って大変だけど、こういうことってなかなかできる経験じゃないよね！」と励まされました。これを機に、多少の困難を楽しむ余裕が出てきたように思います。コロナがだんだん収まってくると、研究室にも活気が戻ってきました。先生方には私のことを辛抱強く見守っていただき、後輩たちには励ましてもらいながら、なんとか日々を乗り切ることができました。

もう少し振り返ると、私は学部時代に研究者という生き方を知って大学院への進学を考え始めたのですが、それにあたって金銭的な面で学費と生活費をどのように工面するかというのが一つの大きな問題でした。私は学部卒業後に一旦就職はしましたが、同時に通信制の学部に入り直して、進学資金の確保と学力向上に努めました。通信制の卒業年度に院試を受けて合格し、この時点で修士課程 2 年間はギリギリ耐えられるが、博士課程はこのままだと厳しいという状況でした。この際に他大の博士課程に行っていた先輩から受けた、「お金は後からついてくるからあんまり心配しなくていいと思うよー。」という楽観的な助言を真に受けて、断腸の思いで退職して進学しました。すると、思った以上に大学院生を金銭的にサポートする制度が官民共にあり(加えて、とても壁の薄い大学寮に 5 年間暮らすなど自身の涙ぐましい努力もあるが)、結果的に博士号取得までたどり着けました。各種サポートは、「最短修業年限の間補助します。」という縛りがあることが多いのですが、それも自分にとっては丁度良い緊張感だったと思います。なお、学振は残念ながら連戦連敗でしたが、この時に作った申請書は他の研究助成金(こっちは通った!)への申請でも役立ちましたので、何らかの形で努力は報われると思って今後博士課程に進学される方は、学振 DC は出してみると良いと思います!

研究以外の学生生活も、コロナが徐々に落ち着いてからはできることが増えてきました。印象深い活動の一つに、博士課程の学生がチームを組んで地域課題の解決策を提言する産官学連携教育プログラムへの参加があります。いくつかの課題が提示され、私はスキー場の若年層顧客の開拓チームに入りました。各自の

専門性を活かしつつ、現地視察を通じて感じたことなども盛り込んで解決案を練っていきます。チームの中では私が唯一スキー未経験で、インストラクターにつきっきりで教わってやっと滑って止まる動作ができるようになりました。しかし、ある程度の年齢以上で新しいことを始めるのは結構大変だなと感じ、スキー客を安定させるために若年層のスキー人口を増やす必要性があるということをも身を持って体感しました。その後もチーム内で色々と議論しましたが、普段考えないことをバックグラウンドの違う人と話して落としどころを見つけるというのはかなり難しく、最終的に全員が納得できるような成果にまでは至りませんでした。しかし、近年では博士課程の学生に専門性のみならず異分野への展開力も求められているので、今回の経験は今後の糧になると信じています。今後、専門以外のフィールドで自分の能力をどのように生かしていくのかを考える良い機会となりました。

修了後は大学で助手として研究や大学運営業務に携わっています。学生として大学に居るとして仕事として大学に居るとしては全く見える世界が変わりました。研究の面では、これまでは研究室の先生にお願いすれば消耗品がいつの間にか補充されていましたが、これからは研究に必要なお金は自分で研究費を獲得しなければなりません。学生時代は成果を出すことに集中できていましたが、今後はどのように外部資金を獲得するかという面からも研究を考えていく事になりそうです。しかし、これは見方を変えれば一から十まで自分の責任で研究活動ができるということであり、研究の自由度は上がると思うので、それはそれで良いのかもしれません。申請を通していくのは大変だとは思いますが、自分の研究者番号が付与されたときは感激しました。また、大学運営業務として様々な事務作業や各種委員会の会議もあり、なかなか学生の頃のように研究だけしていれば良いという状況でもありません。振り返ると、先生たちが何やら忙しそうにしていたのはこういうことだったのかと思うとともに、時間がある内にやりたいことはやっておくべきだったと思っています。ただ、幸いにも研究はできる環境にあるので、今の場所でできることを精一杯やっていきます。

最後に、修士課程から博士課程にかけてずっとサポートいただいた財団の皆さま、お陰様で大変充実した学生生活を送ることができました。また、長崎繋がりですと、大村からつながるプロジェクトにおいて県産品を頂いたり、市長対談の機会を頂くなど学生生活を豊かに過ごすサポートもいただきました。ご支援いただいたことに感謝申し上げますとともに、今後長い目で見て何らかの形で故郷の長崎や大村にお返しができたらと思っています。本当にありがとうございました。